を綴るときは、文献で調べこそすれ、自分の足で調べまわることはしない。なまじ書く前に見聞きすると、空想力が弱まり、詩情が出ないからである。」と述べている。（昭和六十年十一月二十三日『アンドロメダ』百九十五号、西川満「笙歌一曲」）。

⑬龍瑛宗「『文芸台湾』作家論」（昭和十五年十月一日『文芸台湾』第六号）

⑭張良澤前掲論文「四、西川文学の意義」の「二、台湾の民間文芸を香り高い文学に昇華させたこと。」

文中の敬称は省略した。

尚、本稿は聖徳学園岐阜教育大学一九九一年度研究助成金の成果の一部である。

①昭和十六年末に出版した私版詩集『採蓮花歌』に対する堀口大学の西川宛の書簡。この書簡は「年譜十二」に収められている。「年譜」については、注②を参照。

②自撰「年譜」とは、一九九〇年六月六日、人間の星社から刊行された西川満『わが越えし幾山河』のこと。明治四十一年の誕生から昭和五十五年、七十七歳までを編年式に詳述。この本は、もともと西川が現在も主宰する日本天后会の機関誌『アンドロメダ』（人間の星社発行）六十五号（昭和五十年一月）から断続的に連載した自撰の「年譜」で、それより抽出して単行本に仕上げたもの。全三十八回からなる。

③昭和十二年七月、第二詩集『亜片』を装本した時の言、「年譜六」参照。

④西川満の限定本に関しては、西川満『わたしの造った限定本　天の巻』（一九八六年九月九日初版三十部、一九九〇年七月七日再版二十部、日孝山房私版）及び同『わたしの造った限定本　地の巻』（一九九〇年七月七日、日孝山房私版）に、その全貌が詳述されている。なお、これも『アンドロメダ』に連載したものから、その部分を抽出して単行本に仕上げたもの。

⑤張文環「雑誌『台湾文学』の誕生」（一九七九年八月三十日、台湾近現代史研究会編集発行、龍溪書舎発売『台湾近現代史研究』第二号）

⑥野間信幸「『台湾文芸』における張文環」（一九九二年二月一日、中国文芸研究会『野草』第四十九号）

⑦龍瑛宗「『文芸台湾』と『台湾文芸』」（一九八一年一月三十日、『台湾近現代史研究』第二号）

⑧西川満「書かでもの記」（平成四年三月二十三日、日孝山房覆刻三版、近藤正己『西川満札記』付録）

⑨昭和五十五年一月二十四日『アンドロメダ』百二十五号、後、昭和五十五年二月十二日、人間の星社刊『西川満全詩集』にも再録。

⑩台湾の雑誌『台湾風物』第三十巻第三・四期に中国語で発表（民国六十九年九月三十日・同年十二月三十一日）された。なお、「西川満札記・上下」は昭和五十六年二月十二日、日孝山房より、『西川満札記』として少部数が覆刻単行本化された（平成四年三月二十三日三版十部）。

⑪この他にも一九八一年に、人間の星社から自伝『わが七十年』および『自伝』を上梓したとあるが（『西川満全詩集』巻末「著作目録」等）、未見。また、『西川満全詩集』末尾にも本人の手になる「略年譜」がある。本人以外の伝記的記述は、注⑩に掲げた、近藤正己「西川満札記・上下」収録の「略年譜初稿」がある。

⑫この点に就いて西川満自身、自己の創作手法を「レアリスムの嫌いなわたしは、物語

「同じ台北の旧い街でも、艋舺にはあまり興味がもてない。それは純然たるシナ風の街だからである。大稲埕には異国人が住んでいたので、東洋と西洋の混淆が見られ、それがたまらなくわたしには魅力だったのだ。」(年譜四)

この言葉は象徴的である。西川満は満二歳の時に台湾に渡って以来三十年余、台湾を第二の故郷として住んだ、にもかかわらず「純然たるシナ風の街」にはあまり興味がもてなかったのである。この言葉は西川満の文学およびそれにまつわるすべての活動の根源にあるように、わたしには思われる。彼の作品の多くが台湾をあつかい、また台湾語(福建語)を散りばめていたとしても、その作品を理解し称賛したのはおおむね日本人たちであった。つまり、それはあくまで日本人の眼で見た台湾で、当時の日本人の嗜好を満足させる台湾であった。そして、それは逆に当時の台湾人からみるならば、西川満の作品は、深い溝を隔てた絶対に手の届かぬところに置かれた物のように感じられたのであろう。西川満は吉江喬松から「地方主義文学のために一生をささげよ」という教示をうけ、その言葉に従って台湾の文芸界で奮闘した。しかし、その奮闘も台湾人作家たちには違和感をもたれるか、あるいは彼らの反発を招くことが多かった。それは日本政府が台湾に対して「一視同仁」「内台同化」というスローガンをもってのぞんだが、結局はそれをなしえなかったのと相似しているようにも見える。しかし、このことをもって、西川満の台湾における文芸活動を否定しさることはできない。逆に戦前台湾における、また日本植民地下における日本人作家の典型として西川満の文学は、研究されなければならない、と思う。

戦前の台湾文壇において、西川満は善しも悪くも大きな存在である。戦前の台湾文学史を論じる場合、彼の台湾文壇における活動に言及しないものはないといってよい。そして、言及される場合は、必ず非難の対象として扱われる。その根拠は、第一章に述べたように、ほぼ当時の台湾人作家の回想のみに依拠する場合がほとんどである。この点においては、現在に至るまで、実証的な研究はされていないのである。また、西川満の作品そのものについても同様である。この十年来日本においても戦前の台湾文学研究、ことに作品研究も盛んになってきた。しかし、日本人作家についての本格的研究はいまだに皆無である。統治された側の文学研究はいうまでもなく必要である。しかし、統治した側に属した作家たちが、その地で何を感じたのか、それをどのように表現したのかを正確に把握してこそ、統治される側の文学は、そのディテールまでもが浮彫りにされるのではないか。

[注]

る努力を示しているし、台湾詩人協会の設立および台湾文芸家協会の設立にともなう『文芸台湾』の発行等は、前章昭和十五年の頃で西川満自身の言葉を引用したように、台湾文壇の形成を目指したものであった。つまり、師吉江喬松の言を忠実に実行したことになるわけである。

しかし、その作風や文芸活動は台湾においては台湾人作家の反発をかうことになる。それは、先に引用した張文環の回想にもみえるが、龍瑛宗の以下の言葉は些か遠慮がちではあるが、より具体的に西川満に対する不満を示している。

「～西川満氏は作風において違ふが、芥川龍之介、牧野信一、太宰治氏と同じく日本文学の本流に身を寄せてゐない作家である。つまり氏の文学には日本文学の本派をなす暗い素朴な日本的リアリズムが見あたらない。氏の文学は南方の光りと幻想とにあふれてゐる。～中略～さりながら台湾文学の荒蕪的環境は、氏の文学を硬塞化しつゝあるかにみえるのは僕のひが目であらうか。勿論、氏の文学態は技術的に一段と進展を示してゐるが、かゝる領域に満足せず、文学の野っぱらに出で谷間を渉り、崖をよじ登り、婆娑臭い現実を獲得したならば氏の文学はきびしい迫力で享受側に印象せしめるであらう。若し氏がその雰囲気に堪えられないとするならば再び昔の領域に復帰してもよい。そのときの氏の文学は、もはや昔日の姿ではなくて、そこには幻想と現実との綾なす高い融渾体を見出すであらう。そして無限なる作家発展が氏を待ってゐる。」⑬

つまり、ここで龍瑛宗は西川満に対して、「異国情緒に富む耽美的浪漫主義的あるいは芸術至上主義的」な立場を一度離れてリアリズムの観点に立てば、台湾の現実が見えて来るのだ、と忠告しているのである。当時の台湾人作家の立場からいえば、（当時の台湾は芸術至上主義を受入れる土壌自体が準備されなかったという理由もあろうが）、日本政府の中国語の使用禁止（一九三七）、志願兵制度の実施（一九三八）、改姓名運動（一九四〇）、そして皇民化運動と矢継ぎ早の施策の公布という極めて厳しい現実を考えれば、日本人西川満の文学は遊戯的に見えたであろう。また、西川満は小説「赤嵌記」の中で登場人物の一人に「～台南（ここでは「台湾」と言換えてもよいだろう筆者）の人はあまり自分の住んでいる土地と歴史とを愛していない、古きを温ねてこそ、新しい時代の文化の発展がある」といわせているが、この言葉の延長上に民俗研究誌『台湾風土記』や『華麗島民話集』が刊行されているのである。もちろん、この刊行に対する西川満への評価は現在に至るまで高い⑭。しかし、これも当時の切迫した台湾人作家たちの眼には、日本人の異国趣味程度にしかうつらなかったのだろう。西川満は前掲の「年譜」の中で台北の街について、次のように語っている。

『赤嵌記』七十五部を刊行。

昭和十六年十二月、小説『浪漫』を限定七十五部出版。

昭和十七年二月、『国語新聞』（のち『皇民新聞』と改題）に劉氏密の筆名で連載した「西遊記」を台湾芸術社から出版。四月、作家として自立のため台湾日日報社を退社するが、社長の厚意で、出社せず嘱託として給料をもらう。五月、池田敏雄と共著の『華麗島民話集』を日孝山房より刊行。八月、『台湾文学集』を編纂して東京の大阪屋号書店から刊行。九月、「龍脈記」を『文芸台湾』第四巻第六号に発表。十月、龍瑛宗、濱田隼雄、張文環とともに東京で開催された第一回大東亜文学者大会参加。十二月、小説集『赤嵌記』を東京・書物展望社より刊行。

昭和十八年二月、『赤嵌記』により「台湾文化賞」を受ける。六月、詩集『一つの決意』を文芸台湾社から刊行。七月、『文芸台湾』三十三号より長篇小説「台湾縦貫鉄道」を連載。十月、『桃園の客』を日孝山房より刊行。十二月二十日、父純逝去。

昭和二十年一月、父の後を継ぎ樹林の昭和炭鉱社長に就任。同月、『文芸台湾』廃刊。連載中の「台湾縦貫鉄道」を長崎浩編集台湾文学奉公会発行の『台湾文芸』に続載。三月、小説集『生死の海』を台湾文化株式会社から刊行。この会社は「台湾縦貫鉄道」出版するために父純が設立したもの。八月、敗戦。九月、旧総督府情報課から、戦争犯罪人名簿を提出するのに、あなたと濱田隼雄の二人を台湾文化の最高指導者として挙げたといわれ、憤慨する。

昭和二十一年四月十一日、日本に帰着。

三

以上の年譜から、西川満は幼少の時より文学、宗教、造本に興味をもったが、ことに早稲田で仏文学を専攻し、吉江、西條、山内の三人の師に出会ったことは詩人・小説家そして文芸組織者としての西川満に大きな影響を与えたことがわかる。ことに、早稲田大学卒業時に東京に残るか、帰台するか迷ったおりに、吉江喬松から「地方主義文学のために一生をささげよ」という教示をうけ、師の言に柔順に従うが、それが、その後の西川満の歩みを決定したといってよい。そして、その影響は帰台後発表されたさまざまな作品を見ればわかる。詩集、『媽祖祭』、『亞片』、『採蓮花歌』および小説集、『梨花夫人』、『赤嵌記』、『浪曼』などに収められた諸篇は、いずれも異国情緒に富む耽美的浪漫主義的あるいは芸術至上主義的な作品である⑫。また、民俗研究誌『台湾風土記』や『華麗島民話集』の刊行は、捨置かれた台湾の民話や風習などを文芸の一端に昇華す

発刊（『華麗島』は一号で廃刊)。台湾詩人協会の改組についての経緯を次のように記す。些か長文ではあるが、当時の『文芸台湾』をとりまく状況を「西川満の側から」説明しているので参考に引用しておく。

「～沈滞しているこの台湾に、一大文芸活動を展開したいと思い、詩人、小説家の仲間に呼びかけたのだが、主義主張のちがう小説家の間がどうにもまとまらず、短気な私は、それなら一足さきに詩人だけでも、と仲のよい北原政吉君と語らって、台湾詩人協会を結成、発会式をおこない、三箇月かかって刊出したのである。～たった一冊の『華麗島』が語りかけるものは、あまりにも大きい。たった一冊。そうだ。『華麗島』は一号雑誌なのだ。というのは、この創刊号を見た小説家たちが仰天し、詩人がこんなに集まるのなら、自分たちも、と提携を申込んできたからだ。わたしはいさぎよく台湾詩人協会を発展的に解消し、台湾文芸家協会を設立することに協力したのである。こうして、詩誌『華麗島』第二号が、翌年一月一日、綜合誌『文芸台湾』の創刊号に変った。」(年譜九)

「ともあれ、願うのは台湾文芸の興隆であるから、日ごろ台湾日日学芸部長として交情を願っている官民有力者に、その名を列ねることを依頼、こころよく賛同を得た。その方が、官僚にあらずんば人間にあらず、の風潮の土地では、せっかく芽が育ちやすいと思ったからである。詩人の長崎浩君は総督府の役人だが、彼が官服を着て登庁すると、警固の数名の守衛はいっせいに挙手の礼をする。しかし彼が背広で通ると、絶対に礼をしない。つまり人間が貴いのではなく、官服がえらい土地なのである。これは台湾の土地柄を何よりも象徴する挿話だ。エセ学者は、官民有志が一念発起して、文芸家協会を作ったように思っているが、とんでもないことだ。もしそうなら文芸家協会の集まりは、総督府でおこなえばよいはず、なんの必要があって、わたしの小宅を会場に使用しよう。詩人と小説家の結束の目的を達成すると、翌、昭和十六年三月から発行所名を文芸台湾社に変えた。『文芸台湾』はあくまで詩と小説を中心にしたい。ところが協会誌では、短歌・俳句・川柳にも及ばねばならぬ。それらはすでにそれぞれの専門誌があるのだから、屋上屋をかさねる要はない。そこで文芸家協会は、協会誌をもたず、それぞれの雑誌をもつ結社とその所属会員によって構成することに改めたのである。この改革によって、『文芸台湾』はわたしの個性を十二分に発揮できるようになった。～官民有志の名は頂戴したが、寄付金はもらったことはない。名誉会員、賛助会員の会費はいっさい不要とした。正会員の会費は一円五十銭だが、払えないものには催促しない。」(年譜十)

昭和十五年十二月、小説「赤嵌記」を『文芸台湾』第一巻第六号に、同時に限定本

昭和四年四月、詩集『一天四海の春』、五月詩集『AMANTE』、六月詩集『歪んだカンタラ街の血汐』、同月、最初の小説「湯女」を学院の『学友会雑誌』に発表。

昭和五年四月、早稲田大学仏文科に入学。

昭和七年一月詩集『竹筏（テツバイ）』を造り、西條八十に献呈。三月、雑誌『La Poesie』を創刊し、吉江喬松、山内義雄の寄稿を受ける。九月二十三日、台北に帰省中、田中澄子と結婚。

昭和八年、文芸汎論社の岩佐東一郎、城左門より詩の寄稿を求められる。最初の依頼原稿で「ファウスト逮捕」を『文芸汎論』（三月号）に寄せる。三月、早稲田大学仏文科を卒業。卒論「アルチュル・ランボオ」。卒業にあたり東京に残るか帰台するか迷うが、恩師吉江喬松（孤雁）から「地方主義文学のために一生をささげよ、との教えをいただき、台湾へ帰る決意を固めた。」以後の、西川満の台湾での文芸活動は、この言葉によって決定した。また帰台にあたり吉江より「南方は／光りの源／我々に秩序と／歓喜と／華麗とを／与える」という詩句の揮毫を贈られ、以来台湾を「華麗島」と呼ぶ。また、山内義雄は、台北に帰ったら、台北帝大の矢野峰人、島田謹二の二人を訪ねるようにと指示。以来、この二人は台湾時代、戦後を通じて西川満の理解者であり良き後援者となる。五月、台北の実家に帰る。職がなく、帰台以来幼いころ育った大稲埕界隅をくまなく歩く。

総督府の建築家で勅任技師の井出薫を知り、彼が台湾日日の社長河村徹（その頃台湾愛書会を創立）に紹介し、昭和九年一月『台湾日日報』社に入社。七月、「台湾日日」に文芸欄を復活させる。また台湾愛書会の機関紙『愛書』の編集を担当する。九月、媽祖書房を創設、十月、雑誌『媽祖』を発行。「媽祖」とは「天上聖母」のこと。

昭和十年四月、詩集『媽祖祭』を刊行し、萩原朔太郎や西脇順三郎など諸家大家から賛辞をうける。九月、『愛書』四号より西川流装本を導入して本格的に編集にたずさわる。

昭和十二年一月、小説「梨花夫人」（『媽祖』第十二冊）、七月第二詩集『亜片』出版。

昭和十三年三月、『媽祖』第十六冊で終刊。媽祖書房も日孝山房とし装本出版に力を入れる。五月、「西川満氏の詩誌『媽祖』及び媽祖書房の詩集出版事業を表彰し」、内地の雑誌『文芸汎論』より詩業功労賞を贈られる。

昭和十四年二月、和紙を使った横長本の民俗研究誌『台湾風土記』を創刊。九月、台湾詩人協会を設立。十二月、詩誌『華麗島』を創刊、在台日本人及び台湾人六十余名が寄稿。

昭和十五年一月、台湾詩人協会を改組して、台湾文芸家協会を設立、『文芸台湾』を

自伝で、連載終了後、該誌から抽出して単行本に仕上げたものである。⑪

西川満の前半生は、早稲田第二高等学院および早稲田大学仏文科へ在学した昭和二年三月から同八年四月までの六年間を除き、台湾での文芸活動がそのすべてであるといってよい。現今の西川満に対するわたしの興味は、台湾における文芸活動についてである。以下、この自伝によって西川満の前半生、在台時代を概観してゆきたい。

西川満は、明治四十一年（一九〇八年）二月十二日、会津若松市に、西川純・しげの長男として生れた。

明治四十三年四月、満二歳の時、父が、祖父の弟秋山義一の経営する基隆の秋山炭鉱に招請されたために一家は台湾に移住した。大正三年台北市大稲埕入口の、旧台北停車場踏切近くに住み、台北第四尋常高等小学校に通う。この学校で彼は、後の「台湾縦貫鉄道」執筆につながる絵画に遭遇する。

小学校入学時より文学雑誌に興味を抱き、二年生で絵入り雑誌をつくる。三年生のときに隣家に越してきた級友菊田数男（後の菊田一夫」と知り合う。また、小学校時代に池元幼鹿庵『英雄僧日蓮』や田中智学『日蓮聖人の教義』などを通じて日蓮に興味をもつ。西川満の日蓮に対する敬慕はその後ますます強くなり、戦後の『小説　日蓮聖人』、日蓮七百遠忌の『聖譚詩　日蓮聖人』（黛敏郎作曲）や『長篇叙事詩　日蓮聖人』の発表につながる。

大正九年台北一中に入学後、文学熱は次第にたかまり、石版刷りで『杜の詩人』などの雑誌を創刊、また詩集『愛の幻影』、『象牙の船』を手作りで製作出版、既に装本家西川満が芽生える。

大正十二年一月には『台湾新報』に投稿した小説「豚」が新年文芸応募で一等に当選する。また、翌年五月には終生の友人となる版画家宮田弥太郎を知り、文芸美術雑誌『櫻草』を発刊。発表作品にはいずれも「西條まさを」の筆名を使用。

大正十四、十五年と台北高校を受験するも失敗。

大正十五年六月、基隆の税関監吏となったが、父の上京の許可を得たため十二月に退職。この頃、『台湾日日新聞』にたびたび投稿し、また八月には詩誌『扒龍船』を創刊。

昭和二年早稲田第二高等学院を受験するも失敗。翌年四月に合格し仏文学を専攻する。吉江喬松、西條八十、山内義雄に師事する。西川満の芸術至上主義的な文芸傾向は、無論彼自身の資質そのものにもあったであろうが、早稲田の仏文入学とこの三人の教師の影響に負うところはおおきい。五月、詩集『日暮れの街』『ＬＥ　ＪＡＰＯＮＩＳＭＥ』刊行。

るだろう。今は、このどちらが事実であるかという事を問題にしているわけではない。ただ一方に偏した資料や、それによっていつのまにか構築されてしまったイメージをもってのみ判断を下すことは、（たとえ結果的に野間信幸の見解になったとしても）その論文の客観性に疑念が残ることを問題にしたいのである。したがって、この一事を考えても、戦前の台湾文学を研究するうえで、既存の「西川満観」には再検討が必要であり、資料の付き合わせによる客観的な「西川満観」を構築するための研究が必要となろう。もちろん、これは西川満に限らず在台日本人作家全体についても言えることである。そして、このことは日本人台湾文学研究者の当然の責務といえるだろう。

いま、幸いにもそのような西川満研究は台湾人および日本人の間で始まりつつある。

たとえば、張良澤「戦前の台湾に於ける日本文学　西川満を例として」⑨は、西川満の台湾文壇への功罪についての判断はさておき、先ずあるがままに西川満自身をみつめようとしている。その第三章「作家西川満の生涯」では、西川満を台湾の日本人作家として典型的な存在として、その理由を次の四点に置く。

一、台湾を完全に自分の故郷として生きてきたこと。

二、もっとも多く文芸雑誌を発行したこと。

三、もっとも多く文学著者を出版したこと。

四、積極的に「皇民化運動」に協力したこと。

また、第四章「西川文学の意義」では、次のようにまとめている。

一、台湾人に“台湾文学”と言う意義を強く植えつけたこと。

二、台湾の民間文芸を香り高い文学に昇華させたこと。

三、台湾人作家を養成したこと。

四、日本“外地文学”の領域を開拓したこと。

この他にも、近藤正己「西川満札記・上下」⑩があり、戦前の西川満の著作類の発掘が精力的におこなわれている。西川満研究は、やっと緒についたばかりだといえよう。

二

さて、西川満の為人を知るためには資料的に裏付けされた伝記的研究があればよいのであるが、現在の段階ではまだその出現をみない。いま見ることのできるもっとも詳細なものは、西川満自身が一九九〇年六月六日に人間の星社から刊行した『わが越えし幾山河』であろう。これは西川満が総裁をつとめる日本天后会の機関紙『アンドロメダ』第六十五号（昭和五十年一月）から三十八回にわたって断続的に掲載された年譜形式の

視点を置かなければならない。したがって、大日本帝国の威光を背後にもつ、統治者日本人作家に対する研究はいかなる価値をももたない、ということになろうか。

この結果、西川満を初めとする日本人作家たちに視点はとどかなくなる。もちろん、台湾および中国大陸の文学研究者の視点が日本人作家を意識的に無視するのは当然だとしても、日本の台湾文学研究者間においてもほぼ同様にうち捨てられているのが現状である（これは戦前の台湾文学研究だけではなく、日本文学の「外地文学」研究においても同様であろう）。

たとえば、最近の台湾文学関係の論文で、野間信幸は西川満について次のように記す。

「ただ当時台湾文学界のボスであった西川満にとって、上記のような二極化は意にそわないものであったのだろう、彼はたびたび両誌の統合を企てている」⑥

ここでの「二極化」とは、『文芸台湾』から出た張文環がそれとは対立する主張をもつ『台湾文学』を新たに創刊したことを指す。この一節は先に掲げた張文環の文章の別の箇所および張文環と同様、戦前の台湾文壇で活躍した龍瑛宗の回想文⑦に基づき、野間信幸自身の見解として書かれている。さらに野間信幸はこの見解に附注して「～『台湾文学』創刊の動きに対して、西川は張文環の家にまで出向いて行き出版を思いとどまるように談判している」と述べているが、この附注や、西川満を「台湾文学界のボス」とし「たびたび両誌の統合を企てている」との見解は、張文環、龍瑛宗など台湾人作家の回想、あるいはこれまでに伝聞されイメージ化されている「西川満観」によって出てきたものである。

ところで、張文環は昭和四十九年、三十二年ぶりに西川満をその自宅の阿佐谷に訪ねている。そこで、西川満に対して次のように語ったという。

「西川さん、戦後、あなたは随分、デマに悩まされたよね、でも、台湾文学を出すな、などとあなたは一言もいったこともないし、ぼくも聞いたことはない、なによりぼくたち二人がわかっておればいいことだものな」⑧

上の言葉が事実だとすれば、「西川は張文環の家にまで出向いて行く出版を思いとどまるように談判し」た、という上掲の記述とは全く相反することを張文環は述べていたことになる。この会話は、たまたまテープに録音され現在も西川満宅に残っているというが、張文環の言葉のどちらが事実かはわからない。かりに後者が事実であり、もしそれが確認できたとしたならば、さまざまなところで繰り返し述べられてきた前者の張文環の言葉は当然訂正されなければならないだろう。もちろん、西川満の後者の記録をそのまま事実として認定することはできないが、この記録をまったく無視して従来の「西川満観」のみを踏襲するならば、片手落ちであり、客観的立場での研究とはいえなくな

で戦後も代表作『地に這うもの』を出した台湾の作家、張文環の次の一文に象徴されている。

「当時の文学雑誌といえば、西川満氏の編輯する『文芸台湾』一冊だけである。西川満氏は当時台湾総督府の機関誌である台湾日日新報の第二課長であり、その父上は西川純さんと言って、昭和炭礦の社長であり、台北市会議員でもある。したがって西川満氏はバックもあり資金も豊富だ。だが西川議員はファッショ的な人物であり、満さんも御用文芸家である。彼の編輯する雑誌が、彼の個人的な趣味本位におちすぎていると思っているのは台湾人ばかりではない。むしろ人道主義的な日本人の方の殆んどが、あまり歓迎していないようである。私もその『文芸台湾』の同仁の一人であるが、編輯会議のあるごとに私は頭が痛い。その独裁ぶりよりも、有閑マダム的なままごとでもしているようで我慢が出来ない」⑤

この張文環の一文は、戦後三十五年という時の流れを経た後の発言であり、その当時の西川満に対する感じ方が些か増幅されているかもしれないし、また張文環は、西川満の『文芸台湾』に対立する立場に立つ『台湾文学』を主宰することになるので、割り引いて聞く必要はあろうが、当時の台湾人作家たちの西川満に対する見方を代表しているといってよいだろう。つまり、張文環の言葉を言換えるならば、西川満は台湾を統治する立場にある日本人の一人であり、父親は市会議員で炭鉱主、つまり毛並みの良い金持の坊ちゃん育ち、したがって彼の手による刊行物は、その装幀や装本に凝ることからも察せられるように金持の道楽であり、また、その作風も芸術至上主義的で異国趣味に傾き、台湾の現実から遊離し、台湾人作家の写実的現実的な作風と懸隔がある、ということだろう。これは、西川満と共に台湾の地である期間を共にした台湾人作家の感慨としては、肯じることはできる。張文環が「西川議員はファッショ的な人物」と感じて、西川満さんを「御用文芸家」と感じるのはかまわない。文脈上でもこの二人は並記されて述べられている。しかし、この文章はそれにもかかわらず、読む者に「西川議員はファッショ的な人物であり、満さんも（ファッショ的な）御用文芸家」であるというイメージを無意識のうちに植えつける結果をもたらす。もちろん、このような言い方は張文環だけではなく、他の台湾人作家たちも同工異曲的に語っている。そして、このような見方の累積が、「西川満」という名前を聞いただけでも悪い意味での特定のイメージを築き上げてきたのである。客観的な西川満研究抜きに、イメージのみをもってこのような「西川満観」が定着することは、戦前台湾の文学を研究する上で一種の偏りをもたらすことになる。些か大胆な言い方をすれば、台湾文学研究とは、台湾人作家を研究することであり、戦前にあっては植民地下に呻吟する台湾人を描いた作品を通して「抗日」に

〈忘れられた作家たち・一〉

「西川満」覚書 ― 西川満研究の現況

中島利郎

一

「西川満（ミツル）」という名前を聞いても、現在では極めて少数の特定の人を除いては、知る人は少ないと思う。特定の人とは、限定本の収集家、西川満の主宰する「日本天后会」の会員、そして台湾文学あるいは台湾史等の研究者である。つまり、西川満は、装本家、宗教家、植民地下台湾で活躍した作家として、それらに関心をもつものには知られているのである。

西川満は第一に「装本」家（「装本」とは寿岳文章の造語といわれる）であり、「美本は台北からの格言はいよいよ動かぬものとなりました」①と堀口大学と言わしめたほど、戦前台湾において美麗な限定版を数多く出版した人である。出版のための書房や出版社は経営したが、決して出版屋ではない。詩人でありかつ小説家である。しかし、詩であれ小説であれ彼の作品の成立は他の作家と些か異なる。西川満は自撰「年譜」（以下「年譜」と略称）②の中で次のように述べている。

> 「わたしの場合、いつ、いかなる時でも、内容よりは装本材料の方が先行する。材料をいじっているうちに、もうそれと一体になる内容が浮かんでくるのである。これは今日でも変りはない」③

この言に違わず西川満は、戦前の台湾において自著のみで二十冊余りの少部数限定本をほぼ手作りで刊行している（他人の著作を含め、現在までに装本したものは三百冊余になる）。いずれも用紙の選択や装幀に凝った美麗な装本であり、限定本収集家には垂涎の書となっている④。西川満を詩人小説家に先んじて「装本」家という所以である。

現在の西川満は、「日本天后会」を組織しその「総裁」という肩書をもつ宗教家でもある。この点についてはわたしはよく知らないし、本稿には直接関係しないので今は置く。

戦前の台湾での西川満については、台湾文学に興味を抱く日本の研究者の間では広く知れ渡っているといえよう。ただし、それは「西川満」という名のみを知るか、あるいはその文芸活動を莫として知る程度で、いまだ戦前の台湾文学を研究するうえでの研究対象となりえていないのが現状である。その理由は、たとえば戦前台湾で活躍した作家